【講演１】山内清男の加曾利Ｅ式土器と「中峠（なかびょう）式土器」

大村　裕

まず「中峠式土器」とはどんな土器型式かということを説明する。**スライド１**は下総考古学研究会が1976年当時構想していた関東地方の縄紋中期の編年表である。すなわち、勝坂式・阿玉台式と「加曽利ＥⅠ式」の間に位置する中間型式（漸移的型式）として提唱されたのであった。この「中峠式土器」には、その正式な型式設定の前後より疑義を提示する研究者も多く、現在、提唱者である下総考古学研究会も「土器型式」としては撤回している。しかしこの土器群を新型式として設定した1976年当時は、極めて手堅い手順で研究を行なったものであり、画期的研究成果であったのである（予稿集22頁参照）。

これほど周到な手続きを踏まえて土器型式の設定を成就した事例は、日本考古学史を繙いても稀有な存在なのに、なぜ「土器型式」として定着しなかったのだろうか？

原因の第一は、「中峠式土器」が山内清男の土器型式概念から逸脱するものであったということである。山内は、「土器型式は実在し、動かし得ない筈のものである」と定義している。すなわち、「Aでもない、Bでもない」というような、はっきりしない土器（非離散的存在）はとりあえず除外しているのである。ちなみに、「離散的存在」とは「中間がなく他とはっきり線が引ける存在」ということである。こうした存在に絞って分類群を抽出することは、生物分類学において分類体系を構築する上で、基本的な約束ごとだという。山内は、遺伝学や生物学にかなり入れ込んでいたという証言は多数残されているから（佐原眞・伊東信雄など）、そうした配慮は自然に頭の中にあったのではないかと筆者は想像している。

例えば**スライド２**を見て欲しい。左端は勝坂Ⅴ式で右端は加曾利Ｅ１式である。中央の土器は中峠遺跡出土のものであるが、この土器は勝坂式と加曾利Ｅ式の両方の特徴を持つものである。このような土器を下総考古学研究会の諸先輩は仮称「Pre Ⅰ式」（後年「中峠式」と改称）と呼んでいた。しかし、こうした土器は、山内はとりあえず土器型式研究の俎上には載せてはいない。勝坂式と加曾利Ｅ式両方の特徴を持つ土器まで土器型式として取り上げると、土器型式の区分が截然としなくなるからである。

ところが、1960年代初頭から始まった高度経済成長の波に煽られた、大規模開発に対応する事前発掘調査が全国で展開されるようになると、各地で莫大な遺物が出土してくる。ちなみに最近報告書が出版された千葉県柏市小山台遺跡Ｂ区では、何と19トンもの遺物が出土したということである。そういう状況の中にあって、既出の土器型式に当てはまらない土器群が膨大に出土するのは必然であったといえよう。実に「中峠式土器」はそうした難しい「土器群」の一つであったわけである。

「中峠式土器の研究」（1976年）のつまずきの二つ目は、編年学派第三世代の旗頭ともいうべき岡本勇の編年観を踏襲したことである。下総考古学研究会の中核会員であった高橋良治と塚田光にとって岡本は明治大学の先輩であり、しかも彼は下総考古学研究会の会員でもあった。必然的に「岡本編年」が下総考古学研究会における共同研究のベースになっていたのである。岡本による「加曾利ＥⅠ（ローマ数字）式」は東北南部の大木8a式・8b式並行を包括する時間幅が大きい細別単位であった。これが「中峠式土器」の編年的位置づけの基準になったため、研究を誤らせる原因となってゆくのである。すなわち、「加曽利ＥⅠ式」（岡本編年）より「Pre Ⅰ式」が層位的に古いことが証明されたとしても、それだけで「Pre Ⅰ式」の年代的位置づけが確定されることにはならない。くだんの「加曽利ＥⅠ式」が大木8b式並行の加曾利

E2 式（山内編年）の場合もあるからである。筆者は「中峠遺跡発掘調査概要」「中峠式土器の研究」『下総考古学』6 号（1976 年）を検討したとき、この辺の詰めが十分ではなかったと痛感した次第である。

つまずきの第三番目の要因は、「仮説バイアス」が強すぎたということである。1962 年に、千葉県松戸市紙敷在住の湯浅喜代治宅で高橋良治と塚田光が実見した資料は、**スライド 3** の土器である。№.1 の土器には把手の一部に、勝坂式によくみられる三角陰刻文が存在し、隆線上にはキザミが存在する。不定形な区画の中には、勝坂式の末期の土器によく見られる集合沈線が施されている。№.2 の把手には阿玉台式に施される角状押引紋が施され、口辺部文様帯には勝坂式によく見られる連続コの字状文や集合沈線が施されている。図では描かれていないが、口辺部下端を画する隆線上には縄紋が施されている。さらに体部には大木 8 式風の沈線文様が縄紋の上にほどこされている。器形は両者ともに「加曽利ＥⅠ式」に類似する。まさに山内が忌避した複数型式の折衷土器であったのである。縄紋中期土器の研究を熱心に行なっていた高橋良治は、これを見て新型式と直観し、「Pre1 式」と仮称して新型式を提唱しようとした。一方、塚田は、別の問題意識からこれに注目したのであった。彼が学生時代に参加した横浜市南堀貝塚の発掘（1955 年）の折、重複する複数の住居址において、切り合い関係から新旧は明らかなのに、出土した土器は同一型式に属するという事例に遭遇していた。既存の土器型式では時間幅が大きすぎて、ある一時点の住居址の配置を把握出来ないという困難を感じていたのである。この問題意識を持っていた塚田は、〈勝坂式や阿玉台式の特徴を持ち、後続の加曾利Ｅ式の特徴を持つ土器であるならば、既存の土器型式に比べ、極めて存続時間の短い土器型式であろう。もしかすると積年の課題（一時点における集落の形態の把握）を解決できるツールとなるかも知れない〉と勇躍したのであった。それで塚田らは、「Pre Ⅰ式」を完全な「土器型式」として確定するために、中峠遺跡に鍬を入れ（**スライド 4**）、以後長期にわたり、慎重に調査を継続したのであるが、後年筆者らは本報告作成時に「中峠遺跡発掘調査概要」（「中峠式土器の研究」とともに『下総考古学』6 号　1976 年に収載）の記載に多くの誤りを発見してしまった。「Pre Ⅰ式」が「加曾利ＥⅠ式」に先行する、という仮説バイアスが下総考古学研究会全体に強すぎたため、そのような判断ミスをおかしたのではないかと感じた次第である（詳細は予稿集 25 ～ 27 頁参照）。

「中峠式土器の研究」（1976 年）は、編年学的研究から見たら問題はあったが、最近千葉県北西部地域において、「A 型式」でもない「B 型式」でもない折衷土器がたくさん出土し、注目を集めている。それらを生み出した背景を考えることによって、ヒト・モノの交流を知ることが出来るのではないかと筆者らは考えている次第である。そうした意味で、「中峠式土器の研究」（1976 年）は 21 世紀の研究状況を先取りしたものではなかったか、と筆者はひそかに思っているのである。

最後に、20 数年前に筆者らが行なった、「中峠式」とよばれていた類型群の位置付けについて紹介する。勝坂式・阿玉台式の末期に、両者の融合が進み、さらに大木式の影響を受けて折衷的な一群の土器が生まれる。これが「中峠式」と総称される類型群である（**スライド 5**）。網で囲った部分が、「下総」が抽出した類型群（旧中峠式土器）、その外側に他の研究者が「中峠式」の仲間とした類型群がある（北 50 住型深鉢、台耕地型深鉢など）。これらは既存の在地土器型式と共に一定期間併存し、加曾利Ｅ式の古い部分の時期まで存続するが、やがてそれらは加曾利Ｅ式の類型のなかに取り込まれてゆくことになる。これはあくまで想定図であり、さらに具体的にその生成の過程を検証すべく、「中峠式」の分布の中心である房総半島における勝坂式や大木式の研究、さらには阿玉台式の研究に取り組んでいるところである。

山内清男の加曾利E式と「中峠式土器」

記録集用スライド

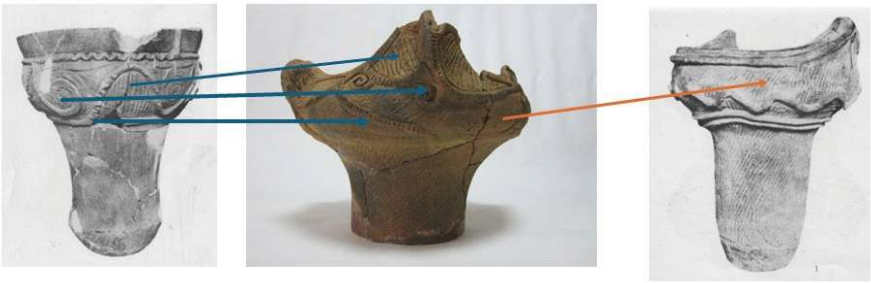
1. 中峠（なかびょう）式土器とは？

－縄紋中期土器型式（関東地方）の編年（下総考古学研究会、1976）－

五領ヶ台式土器
勝坂式土器　阿玉台式土器
中峠式土器
加曾利ＥⅠ式土器
加曾利ＥⅡ式土器
加曾利ＥⅢ式土器
加曾利ＥⅣ式土器

大村①

2. 松戸市中峠遺跡第6次調査地点3号住出土土器（中央）と勝坂式・加曾利E式の比較

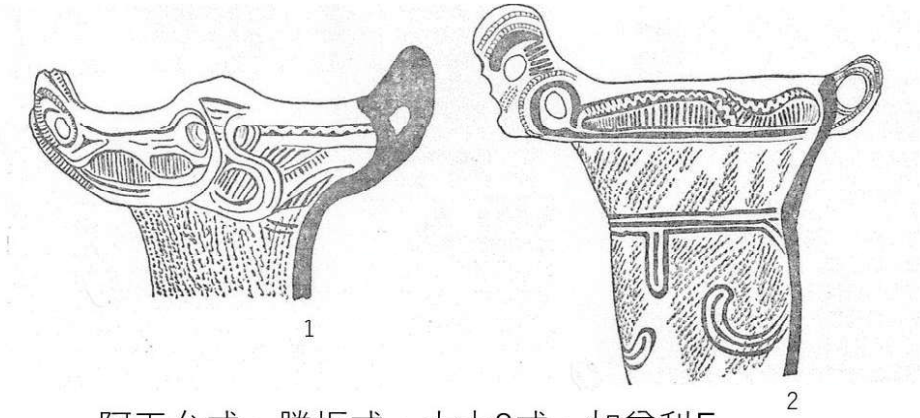


勝坂式（『日本先史土器図譜』による）

中峠遺跡第6次調査地点3号住出土土器（下総考古学研究会提供）

加曾利E式（古）（『日本先史土器図譜』による）

3. 最初に発見された「中峠式土器」（「Pre1式土器」と当初は仮称）



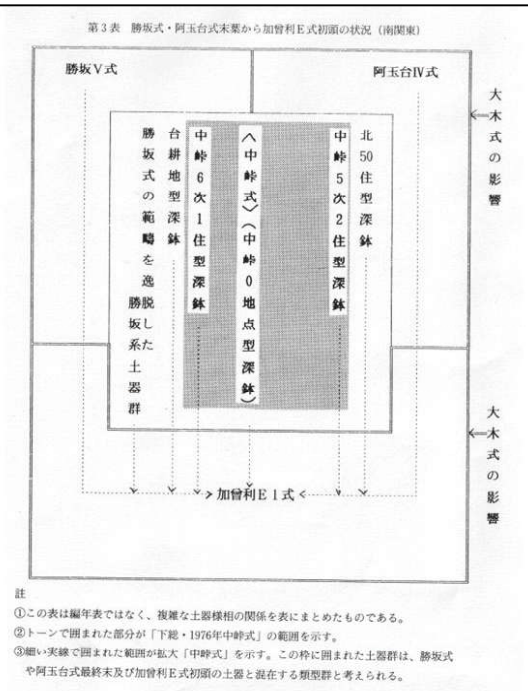
阿玉台式・勝坂式・大木8式・加曾利E式の特徴が混在している

大村②

4. 松戸市中峠遺跡全景（松戸市教育委員会提供）

中峠遺跡第1次調査地点

第４図　中峠遺跡全景（北方より）　（松戸市教育委員会提供）



第３表　勝坂式・阿玉台式末葉から加曾利Ｅ式初頭の状況（南関東）

勝坂Ⅴ式

阿玉台Ⅳ式

大木式の影響

勝坂式の範疇を逸脱した勝坂系土器群

台耕地型深鉢

中峠６次１住型深鉢

〈中峠式〉〈中峠０地点型深鉢〉

中峠５次２住型深鉢

北50住型深鉢

大木式の影響

＞加曾利Ｅ１式＜

註

①この表は編年表ではなく、複雑な土器様相の関係を表にまとめたものである。

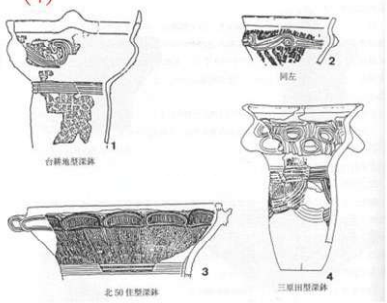
②トーンで囲まれた部分が「下総・1976年中峠式」の範囲を示す。

③細い実線で囲まれた範囲が拡大「中峠式」を示す。この枠に囲まれた土器群は、勝坂式や阿玉台式最終末及び加曾利Ｅ式初頭の土器と混在する類型群と考えられる。

5. 既存の土器型式と「中峠式」の関係模式図

（下総考古学研究会1998年）

〔参考〕台耕地型深鉢（1～2）、北50号住型深鉢（3）、三原田型深鉢（4）



大村③